

ガーフィンケル・シュッツ・パーソンズの関係

～ヘリテイジを参考にして～

高木竜輔

0. はじめに

今回はJ・ヘリテイジの「エスノメソドロジー」という論文の中の、冒頭部と「行為理論再考」という小項目に関して要約を行い、それをもとにしてコメントを行うことにした。そのコメントの目的は、ヘリテイジの提示するガーフィンケルとパーソンズとシュッツのそれぞれの関係についてである。この三者の関係をどのように描くかについてはエスノメソドロジーの世界においてさまざまに議論が行われ、まだ一つに定式化されていない問題である。一般的に、エスノメソドロジーにおける三者の関係を簡単にいうと、ガーフィンケルは、パーソンズのもとで研究を行っていたにもかかわらず、パーソンズとは相対立する理論をうち立てたこと。そして、自分の理論を創り出す際のヒントをシュッツから得た、ということになる。しかし問題を大きくしているのは、ガーフィンケルが自分の理論を創り出す際に、パーソンズからも何らかの知的源泉を得たといっていることである。つまり、ガーフィンケルはパーソンズからどこまでのものを自分の理論に取り入れたのかということである。

そういったことから、この問題をヘリテイジの論文を参考にしながら分析してみたい。

1. 要約(224ページから232ページ前半)

1967年にハロルド・ガーフィンケルの「エスノメソドロジー研究」の第1版が出版された。それは次のような意味を持っている。つまり社会学的分析にとって新しく、また革新的でもあるこのアプローチが社会学の世界に出現したということである。この新しいパースペクティブは急速に支持者を得るようになり、多種多様で、影響力のある一連の経験的な研究をますます刺激した。しかし、たとえガーフィンケルの著書が直接的に重要なものとして認識されていても、エスノメソドロジーは社会学的のコミュニティのなかに準備と心のこもった受け入れを見出すことができなかった。つまり、反発を持って受け入れられた、ということである。むしろ、ガーフィンケルを評して、彼以前のデュルケムのように、彼のアイデアが「厳しい批判の貢献」を払われる、と言われていたかもしれないのである。エスノメソドロジーに対する初期の反応のなかにはさまざまな異議申し立てがあったが、そのうちのたくさんのものが、お互いの強く相容れないものであり、その結果として、この新しいパースペクティブに対する議論が華々しいものであるよりは暗いものとなってしまった時期であった。

たくさんの要因がこの結果に関連している。例えば、ガーフィンケルの著書は難解であり、ときたまわかりにくく、あいまいである、といったことである。それらは基礎的で、理論的な連続性を持ち得ているにもかかわらず、それらは、古典的な社会学的な判断基準によって組織的にまとめられていないのだ。そのために、この新しい研究に対して悪口を言う人だけでなく支持者の間においてもかなりの混乱や誤解を生じていた。その上さらに、「エスノメソドロジー」が発表された時と

は、社会科学における大規模な理論的变化が確認できる時期であり、(その時期というのは)社会科学において、以前最も有力であったパーソンズの構造-機能主義パラダイムが失落し始めていた時期であった。

ガーフィンケルの著書が難解であり、かつ(理論的変遷が)急で、混乱させるような理論的变化があったその当時に、(社会学理論において)一般的なパラダイムとなったので、彼の独創的な理論化と驚くべき経験的な諸研究は、時々不正確に理解され、平凡化されたものとなっている。そのような不幸な出来事のために、エスノメソロジーは「実体のない方法」として解釈されるようになり、さらにひどいことには、(社会学が今まで研究してきた)社会組織それ自身の否定のための媒介者として、いわば、何でもありの社会学として解釈されるようになった。この避けられない結果によって、ガーフィンケルの研究の意義は、— ガーフィンケルの受けた初期の刺激というものが、パーソンズの理論的集積に対しておこなわれた鋭い批判から引き出されたものであり、その鋭い批判とは、(パーソンズの)構造-機能主義の理論的地位が揺るぎはじめた、はるか以前に取り組みされたものであるが、— 批判と反論のが行われた、混乱した状況のなかで失われたこととなった。そういったわけで、ガーフィンケルが— 彼は騒々しい論争のなかに自分が介在していることを不愉快に思っていたのだが、— まさしくその用語である「エスノメソロジー」がそれ自身、命を獲得した決まり文句となり得たことを初期の頃に宣言したことは少しも不思議なことではないのである。

ガーフィンケルの終生の理論的な活動は、今も社会学の中心的なトピックでもある概念的領域の領域に向けられつづけた。これらの問題、すなわち社会的行為の理論、間主観の本質と知識の社会構造の問題は複雑に絡み合っている。これらの問題の概念的な定式化は、社会組織の概念化のなかで理論的、方法論的な分派に分けてしまったので、彼らはその学問分野の理論的イノベーションの中心的立場を代表している。ガーフィンケルは実践的推論、実践的行為と言った基本的特性の探求に関しての一貫した連続性をもって、この領域にアプローチしたのだった。これらの研究を行っていく過程において、動機づけ問題に関するその伝統的な先見的関心事とは違った方法で行為の理論を探求し、聡明な方法によってそれ(社会学理論)を軌道修正することを探求した。そしてその方法をもちいて、意識する、しないにかかわらず、社会的行為者は社会的行為と社会的構造を認識し、生産し、再生産している。しかしながら、行為者が聡明であるということについてのこの強調点は、その方法を発見することについて新しい価値を見出すこととなった。そして、その方法によって社会的行為者は自分たちの状況を分析し、彼らに関する間主観的な理解を分かち合うことができる。ここにおいて、ガーフィンケルの研究は通常理解に関する、避けがたい文脈上の特徴に焦点を合わせるようになり、この焦点を用いて、かなり複雑で、精密な方法に関する高い評価を受けた。そして、その方法によって出来事に関する文脈は彼らの解釈にリソースをもたらしているのである。

この新しいアプローチはそのうえ次のことを必要としている。というのは、行為と知識に関する分析は、お互いに、十分に統合されているのである。この統合はガーフィンケルによって社会的行為の分析に対しての、広く用いられている動機付け・アプローチから、手続的・アプローチへの転換によって達成されたのであり、そしてメンバーが、組織化されている出来事の背景を作りだし、維持しているというまさにその諸活動がそういった、説明可能な背景を作り出すための手続きと一致しているという彼の一貫的な長所において、計画的に要約されている。この基本的な観点から、新しい方法における特別な社会的慣習の実践と過程とを(理論に)付け加えること、そして、言語

的コミュニケーションの過程に対して新しい態度を見出すことが可能となった。そしてさらに広くいえば、彼らが存在している社会的に説明可能な諸現実に対する新しい理解と、その現実を人々が受け入れることを扱い、把握することを得ることが可能になった。

ガーフィンケルと彼に協調する者たちによってなされた研究の内容の関して実質的に分析してみようというのがここにおける主なトピックである。ここでおこなわれる研究の結果は、社会学理論や社会的なものにおける根本的な側面に関して、最も深く、チャレンジングな再編成を構成するものであり、そのうえそれは、経験的な研究に関して有力なプログラムとなった。この章の目的はそれらが出現してきた社会的理論の文脈に対する言及によってガーフィンケルの理論的研究を位置づけることであり、彼の考え方が社会的行為と社会的組織の本質に関する再概念化をみちびいているという主要な方法を説明することであり、彼のイニシアティブの結果として現れてきた、いくつかの主要な種類の経験的研究を概説することである。

行為理論再考

1946年から1952にかけて、ガーフィンケルはハーバード大学の博士課程の時に、T・パーソンズのもとで勉学に励んでいた。1946年において、パーソンズは新しく創設されたハーバード社会学関係学科長に就任し、彼のリーダーシップはシステムティックな社会学理論の発展の、更なる飛躍に貢献したのだった。パーソンズの目標は、心理学、社会学、人類学といった学問を単一の枠組みにおいて結びつけることであり、その理論的枠組みとは、『社会的行為の構造』において「主意主義的行為理論」として描かれている。この努力の結果はたいへんに大きな影響を及ぼしたはずである。パーソンズ的な理論体系に関してのちよつとした批判はあつたにもかかわらず、第二次大戦後の20年間に、それは英語圏の社会学理論を支配するようになった。ガーフィンケルがハーバード大から出るちょうどその時において、その新しい理論的枠組みとしての批判を発展させたのは、上記で述べたような理論的な、このかなり変化した理論的な雰囲気であつた。この批判はパーソンズの仕事の集大成の最も根本的な前提条件を批判し、このことが、社会学理論の現代における議論において、知られるようになるのにほぼ30年かかっている。

ガーフィンケルがハーバード大学ですごした数年間に会つた、パーソンズの行為理論は本質的に行為の動機についての理論であり、そして、2つの根本的な関心事によって支配されている。1つ目は、人間は単に外部環境からの圧力に対して受動的な存在ではないということとして理解されるべきではないということである。そうではなく、反対である。たとえば、普通の男性と女性とが——時には非物質的な種類のものもあるが——様々な障害に直面して、目標を実現するために大きな犠牲を払ってまでも結婚することは、人間の社会と歴史において中心的な特徴である。パーソンズの主意主義的な形而上学でもあるこの最初の関心事は、規範的に価値づけられた目標を追求する際に、努力というものの主体的な方向性を強調することである。

パーソンズの2つ目の関心事はホブズの有名な、自然状態におけるカオスの議論から引き出されたものである。ホブズ問題は、パーソンズが定式化したものだが、それは1つの疑問を生み出した。その疑問とは、どのようにして社会的行為者の積極的な闘争状態をそのような方法、つまり、社会関係は暴力と欺瞞の行使によっては決定されないという方法によって、和解させることができるということである。そういうわけで、理論的な立場からいうと、パーソンズの行為理論における

動機付け問題は、目標を積極的に追求する社会的行為者の存在を考慮の入れられている一方で、同時にホブズによって主張された秩序問題を回避する(何らかの)メカニズムの存在にも言及しているのである。

よく知られているように、ヨーロッパの社会理論家たちの議論の「収斂」の結果として表現されているのだが、パーソンズの(このことに対する)解決は本質的にデュルケムから引き出されたものだ。社会化の過程において内面化された道徳的価値は、行為の諸目的と、そういった目的を探求するための手段の両方において、強力な影響力を行使することができるといった議論を具体化した。社会の中において——究極的には、中心的な価値システムの形態において——それらの価値が制度化されているという範囲において、社会的凝集性が諸目的と諸期待との共有形態においてあらわれ、それゆえ、(それら2つの)統合された活動のパターンとしてあらわれるだろう。

そういった議論は、ハーバード大学からの出版物において、文化的システム、社会的システム、パーソナリティ・システムの中の社会的組織に関する現在よく知られている、3部からなる分析的視点を用いて、それらの議論は肉付けされた。というのも、制度的な役割要求(role requirements)の概念は、「パターン変数」、パーソナリティ・システムの「欲求性向」を動機づけるものとしての価値の内面化、そして2面性を有している拘束性プロセスを伴って、社会的相互行為に関する「ダブル・コンティンジェンシー」の有名な議論によって明記されている。

パーソンズが、規範的同意が諸社会において経験的な特徴であるという点を過大評価していた傾向にあったことを、批評家がいろいろと議論している一方で、次の3つのことが印象的なこととしてあげることができる。それは、1つ目は社会統合はシステム統合と混同されるべきではないということ、2つめに、他の動機付け要因は社会的行為の分析において重点的に研究されるべきであること。3つめに、行為の動機付けの側面に対するパーソンズ的な理論の強調点は、実質的には解明されないまま残っていること、である。にもかかわらずパーソンズは実質上、社会的行為者が自分たちの諸行為を調和し、彼らを自分たちの道に導くということに関しての理解を用いることによって、いかなる関心を排除して、動機付けについての理論を強調したことになる。この批判的な意味において、パーソンズは少しも行為理論を構築することに失敗しており、その代わりに、わずかに行為に対する性質の理論を構築したのみである。いかなる社会的行為に関する純粋な分析にとって重要なことは、行為者が、自分のおかれた状況に関心を寄せている知識の概念化である。このことは、知識と方法の、その本質と特性に関する問いに対する回答を要求しており、そして、その知識とは、社会的行為者の特性であると適切にいえるものであるし、その方法とは、知識が社会的行為者によって使用されており、行為理論の中において分析的に扱われるべきだという方法である。そして戦後すぐの時期にそういった批判的な問題に対して、ガーフィンケルはかなりの根本的な点において、パーソンズの観点から離れるようになった。

パーソンズの著書において、行為者の知識の問題は比較的わずかしが言及されていない。しかし、それでもなお、知識に関する問題は、合理性に関するパーソンズの議論を通して、自分の理論化に深く、根元的な影響力を与えている。パーソンズによれば、行為者の行為が科学的知識によっても説明できる、(そういった)知識の応用性に基づいているという点に関して、その重要性を認識することによって行為者の合理性は決定される。そのような(科学的知識と行為者の知識とが)矛盾なく存在しているところにおいては、行為は本質的に合理的なものとしてみなされるだろうし、行為に関する行為者の説明は、——それは、行為に関しての科学的説明との矛盾がないときに——科学的に十分なものとして必然的と見なされなければならない。

しかしながら、大多数の事例において、自分たちの行為に対する行為者たちの説明は、(社会)科学者の説明と一致しないだろうし、そして、それらの事例において、パーソンズはこのように提唱しているのだが、(パーソンズの説明ならば)行為者の説明という視点が欠如しているかもしれない。このような事例において、行為者の行為に関する科学的説明というものは、内面化された規範と価値に関する動機付けの役割というものの存在によって言い表せるだろう。1つの根本的な隔たりは、2つのものごとに間において作られる。1つは、行為者の自立した理性を伴った合理的行為、もう1つは行為の、その時々、規範的説明の立場に立った、行為者の理性が度外視されている非理性的な行為である。この隔たりは、パーソンズによって繰り返し述べられた次のような観点によって構成されている。つまり、もし、道徳的価値がホブズ的なカオスに対抗して、効果的な予防になりうるができるのなら、社会組織のメンバーたちは、自分たちが内面化している規範的要素に対して道具的志向を使用することはできないだろう。というのも、もし一般化されたならば、社会の道徳的構成を徐々にむしばみ(undermine)、利害関係を不安定な状態のままにしておくマキャベリズム的な打算をそのような志向が引き起こす可能性があるからだ。それらの立場の蓄積的な効果というものは、注目すべき点にたいして社会的行為者の聡明さを認識すべきことであり、ガーフィンケルの顕著な用語における、「判断力喪失者」として行為者を扱うべきことである。そして、行為の具体的な状況における行為者の理解と理性は、社会的行為に対する分析的なアプローチとは無関係である。

社会的行為の分析に対するパーソンズのアプローチに対抗して、それとは違う他のアプローチを創出している際に、ガーフィンケルはアルフレッド・シュッツの研究を大いに参考にしている。アルフレッド・シュッツは一連の理論的な著書の中において、行為理論のなかにおいて行為者の知識を取り扱うための決定的な立場を作り出した。彼の初期の著作から、シュッツは、社会的世界はもともと広く社会的である常識的なカテゴリーと構成概念とによって解釈されている、ということを強調している。それらの構成概念は人々にとってのリソースであり、そのリソースを用いて、社会的行為者は、自分たちの行為の状況を解釈しており、そして、他者の意図していることや動機を把握し、間主観的な理解や調整された行為を達成し、より一般的に言えば、社会的世界をナビゲートしているのである。それらの中身や特性は、理論的、経験的なレベルの両方において、明白にシステムティックに統合されることを必要としている。確かに、シュッツは主張しているが、そのような構成概念の内容と特性とは、社会理論 — つまり、日常生活と日常的経験の存在する社会的世界に対して行われるその言及 — それに関して、その基礎を作り出すことによってその重要性を認識することができる。そして、その社会理論はわずかに次のことの本質的な保証を行うのみである。それは「社会的現実の世界は科学的観察者によって作られた虚構の、存在しない世界によって取って代わられないだろう。」

理論的なレベルにおいて、シュッツは常識的知識や認識に関するいくつかの重要な特性を詳しく述べてきた。第1に、日常生活の世界は、シュッツによって「自然的態度のエポケー」とよばれたものである。日常生活において、物事は彼らが思っているようにはならないかもしれない、過去の経験が現在に対して信頼できる指針とはならないかもしれないという、一般的な「疑念の停止」(suspension of doubt)といったものが存在する。ありふれた物事や出来事にたいする客観性や典型的なことは、あたりまえで、根本的な事柄として扱われている。2つ目に、シュッツは次のことを提唱している。それは、行為者が志向している他者というものは一連の主體的な作用を通じて、(その人の)経験の連続性によって積極的に構成されているということだ。この文脈において

特に重要なことは次のような概念である。つまり、自然と社会的他者との両方の構造は日々変化している「アイデンティフィケーションの統合」を通じて、必然的に、連続的に最新のものに更新されているという概念である。この方法においてこそ、他者は、身体的パースペクティブにおける変化が生じているにもかかわらず、また、たしやが生きている時においても、彼らの変化している形態と様々な振る舞いの表示が行われているにもかかわらず、全く同一の他者として、安定的に存在しているのである。

3つ目において、シュッツは次のことを議論している。それは、社会的世界におけるあらゆる他者は、もともと、圧倒的に社会的である「すぐに使用できる(at hand)知識の集積」によって補完されている「熟知とあらかじめ存在している知識(familiarity and pre-acquaintanceship)」といったフレームワーク内において構成されている。4つ目は、社会的構成概念のこの蓄積は類型化された形態において維持されている。行為者が社会的世界を認識し、分析することに関するこの類型化された知識は、正確であり、また修正できるものでもあるが、しかし、その構成概念が、行為の組織化のための実用的なリソースとしての役割を持っている日常生活の態度の中で、それらの妥当性や有用性に対してのいかなる一般的な疑問の中止されたままである。さいごに、シュッツは次のことを述べている。行為者たちの間における間主観的な理解は、参与者たちが「パースペクティブの相補性に関する一般命題」というものを前提としている積極的なプロセスを通して達成されているということである。例えば、行為者それぞれを、異なった経験的世界に導いている、行為者各人のパースペクティブ、自分の今まで生きてきた歴史、動機付けといったものが存在しているにもかかわらず、彼らはそれでもなお、自分の経験を「あらゆる実践的な目的に対する同一性」として扱うことができるのである。

常識的な知識に関しての特性のこのような説明に対して、シュッツは重要な補足条項をつけ足している。その重要な補足条項とは、常識的な知識とはかなりばらばらな寄せ集めとして組織されている、ということである。そのばらばらな寄せ集めの中においては、「明白かつ独自の経験は、あいまいな推測をも含んでいるということである。例えば、原因や結果だけでなく、動機、手段、目的も、彼らの現実の諸関係に対する明白な理解の存在を無視してつなぎ合っており、」そして、「我々は、自分たちが支配しているそういったすべての仮説の確実性に対する保証をどこにも持っていないのである。」科学に特有な特徴と、常識的な知識とは、比較にならないのである。シュッツが議論しているには、理念的に合理的な行為は、常識的な世界において探求されるべきものではない。そして、その常識的な世界において、たしかに「行為はせいぜい部分的に合理的であり、そういった合理性はさまざまなあり方を持っている。」のである。

ガーフィンケルはこの分析をわかりやすく進展させて、次のようなことを提案している。それは、もしありふれた社会的行為が、科学的合理性の独特な特質の前提となっているのなら、その結果は、人々の諸活動がうまく関連している状態ではなく、むしろ逆であり、混乱であり、アノミーである。社会的世界の出来事に関して科学的に根拠のある志向というものは、このようにありふれた出来事の流動性を扱うことにとって、理想的な戦略ではない。ガーフィンケルは主張しているのだが、それゆえ行為者の判断を評価することに対して全く何の確信も得られないことに対するそういった水準としての、その(科学的知識)の不当な要求、それは実践的な行為の性質を分析する際において、不要なものであり、してはならないことである。さらに付け加えていうならば、合理的行為の観念的概念がそういった事態からもたらされるのなら、その方法は、行為の過程にあいだにおける、妥当性を持つ選択を作成する際に、行為者の現実的知識に基づいて、(そのことに関

する)分析をはじめることができる。たとえば、「行為者が実際に使用している、判断操作、選択、結果に関しての評価などなどである。」

この最後の論点に関してガーフィンケルは社会学的分析のための新しい学問領域を作り出した。それは、行為に関するありふれた状況において、実践的、常識的な推論の研究である。さらに加えて、そのような提案は、ありふれた推論の研究においてその対象の中心的な点として、科学的合理性を分析の判断基準にすえることに対する拒否を織り込んでいる。にもかかわらず、この提案から導き出される研究プログラムは、決して自明なものではない。前衛的な功利主義者たちによる、社会的行為に関する以前の理論的モデルは、その基礎において、科学的知識や科学的活動の性質が決まり切った形で使用されており、そして、その基礎とは、日常生活がそういった特質とは一致していないという点を描くことである。しかし、そのような比較判断基準がかけているのに、どのようにして常識的知識や行為の性質を記述することができるのだろうか。

ガーフィンケルは「かっこ入れ」という現象学的手続きの、その変化に関する問題にアプローチしている。参加者が、誤解のあらゆる程度に志向しているとして扱われている、社会的構造の特権的な見解からはじめようというのではなく、それよりも、この手続きは社会的構造の特権的な見解に関するいくつかの、そしてすべてのコミットメントを中止する際に、分析者に影響を与えている。そして、それは分析者と参加者の両者によって保持されている見解を含んでいるのだが、参加者が志向している社会的構造をどのようにして創り出し、整理し、生産し、そして再生産しているのか、ということに関する研究の立場に立っている。このことは、そのような誤解や議論をつくりだしてきた「エスノメソドロジイ的無関心」という有名な手法である。実際に、行為者たちを維持している、または逆に徐々に傷つけているといった効果を持っている判断を停止する一方で、それは単純に、実践的な推論や実践的な行為に関するシステマティックな性質の研究を含んでいる。「カッコ」の中において、実践的な活動やそういった性質はできる限りていねいに、できるだけわずかな前提条件に関して考察されている。

そういったカッコの中において明らかにされているのだが、「エスノメソドロジイ研究」の中においても報告されている具体的な分析は、実践的な推論や行為に関する研究に対して2つの主要なアプローチの筋道を含んでいる。まず1つ目は、カッコ入れの実験に関して、ガーフィンケルはシュッツの次のような議論を発展させている。つまりそれは、どのようにしてありふれた活動の相互理解が達成され、維持されているのかについての一連の分析の中で、社会的行為者は「パースペクティブの相補性に関する一般命題」というものを前提としなければならない、ということである。2つ目は、行為や出来事、人間関係の構造に関するありふれた理解の達成のために、常識的知識に関する知識というものの役割に対する一連の論証を考案した。彼らが明らかにしている中心的な事柄に対する、さまざまな言及を支えている文脈的なリソース描き出すために、また、リソースとして必然的に依存されているために、そして、そのようなものとして強く信頼されているために、この知識はかなり複雑なものとして示されている。

このようにガーフィンケルが経験的なものだと思なした問題は、行為者が自分が行っている物事をどうにかして知り、そしてお互いに共通して、それをどうにかして知ることができる、という事実である。ありふれた行為やありふれた理解の性質におけるガーフィンケルの経験的研究は、このように行為の出来事を出発点としてはじめられた。

発見された出来事に秩序が存在するのは当然のことだが、その時々(他者との)共有において一斉に孤立した存在であるにもかかわらず、その疑問は、いかにして人間が協力して秩序を構

築すること、価値を判断すること、維持すること、変化させること、確認すること、変化させること、うたがうこと、定義することの必要性を確認しているか、ということについての秩序性となることである。

それは、社会的行為の分析の、構成的特徴として解釈されている、この新しい「秩序の認識問題」であり、それはガーフィンケルが最初に研究しはじめたことであり、エスノメソドロジーの誕生において根本的なことである。

2. コメント(この論文全体に関する簡単なコメント)

この論文が発表されたのが1987年である。つまり、ガーフィンケルの『エスノメソドロジー研究』が出版されて20年になるわけだが、この論文が、ガーフィンケルのことに関しての議論に集中していることは注目すべきことと思われる。

たとえば、現在のエスノメソドロジーのひとつの大きな流れである会話分析に関しては、(この論文は42ページであるが、そのうち)5ページにおいてのみしか言及されていない。このことだけを見るならば、ヘリテイジが一見、会話分析をエスノメソドロジーにおける一分野とはみなさず、特殊なもの、例外的なものともみなしていると思われるかもしれない。それは、会話分析がどちらかといえば言語学の研究雑誌の方にたびたび掲載されていることなどからもわかる。しかし自分が考えるには、その逆である。ヘリテイジは会話分析もガーフィンケルの行っている研究(たとえば、期待破棄実験など)も、同じ「行為に関する研究」であると言いたいのではないだろうか。それは、会話分析が、その会話分析の基礎はガーフィンケルの研究に依拠しているということをサククスやシェグロフなど多数の会話分析者が言及していることから分かる。だからこそこの論文において、現在最も頻繁におこなわれている「会話分析」の研究がエスノメソドロジーの学史的論文においてわずか5ページしか扱われていないことも納得できるのではないだろうか。(ヘリテイジは多数の会話分析に関する論文を発表しており、現在も会話分析をもとにした研究を行っている。)しかし、今回はこの論文の「行為理論再考」の部分についてのみ要約したのみであり、会話分析に関しての部分を訳してはいないので、証拠は全然発見することはできなかった。大変残念である。

3. 行為の分析に関するガーフィンケル、パーソンズ、シュッツの関係についてのコメント

まず、ガーフィンケルとパーソンズの関係に言及してみることにする。注目すべきことはガーフィンケルがパーソンズのもとで勉学に励んでいる一方で、ガーフィンケルがパーソンズとは正反対の立場にある理論を構築したということである。このことについての説明はさまざまな論者たちによっておこなわれており、ヘリテイジも基本的にはこの立場に立っている。

ヘリテイジはパーソンズの行為に関する議論について詳細に述べている。ヘリテイジは、パーソンズの行為に対する分析は、「行為者の行為に関する科学的説明というものは、内面化された規範と価値に関する動機付けの役割の存在によって言うだろう」というようにまとめている。そのことに関して一般的におこなわれている、代表的な批判を用いてパーソンズの理論の正当性を批判している。

つぎに、ガーフィンケルとシュッツの関係におけるヘリテイジの見解を見てみよう。ヘリテイジは、「ガーフィンケルが、誰から自分の理論に対するその知的源泉を得たか」について、基本的には、ガーフィンケルはシュッツの議論に影響されていると述べている。それは、「ガーフィンケルはかなりの根本的な点において、パーソンズの観点から離れるようになった」(本研究ノート4ページ)と述べていることや、シュッツをほとんど批判なしで紹介していること、「社会的行為の分析に対するパーソンズのアプローチに対抗して、それとは違う他のアプローチを創出している際に、ガーフィンケルはアルフレッド・シュッツの研究を大いに参考にしている。」と述べていることなどから分かる。

ガーフィンケルがシュッツの議論を全面的に採用していることについて、ヘリテイジの説明はシュッツについての解説のところでおこなわれている。それは次のような内容からである。行為者の行為の説明に対してさまざまな議論がいままでおこなわれている。パーソンズは行為者の行為は科学的な説明によって説明できると言っている。一方シュッツは、行為者の行為は科学的な説明によっては説明できず、行為者の視点というものを念頭に置けなければならないと述べている。行為者の行為を分析することに関してパーソンズとシュッツが対立した立場にあったことは、他のいろいろな学者も共通に認めるところである。この両者の立場のはざま、ヘリテイジはガーフィンケルの知的源泉のほとんどがシュッツから導き出されていると説明している。

このヘリテイジの議論に関して、一つ疑問なことが少しある。それはヘリテイジがこの論文の中でガーフィンケルの博士論文である「他者の知覚」に言及しているにもかかわらず、ヘリテイジはガーフィンケルが主にシュッツからその知的源泉を得ており、パーソンズからは何も得ていないという結論を導き出しているということである。

たとえば浜日出夫(浜, 1992)は「他者の知覚」に言及しながら、このような問題について別の観点からのべている。それは、ガーフィンケルの知的な立場がパーソンズとシュッツの両方から引き出されていることに注目している浜日出夫の論文(浜, 1992)において確認することができる。浜は、1952年におけるガーフィンケルの博士論文である「他者の知覚」に基づいて、このように述べている。

「ガーフィンケルが『行動に意味を結びつけるのは観察者であって、行動を行っているのは被観察者ではない。行為を反省において経験するのは観察者である』と述べる時、ガーフィンケルがどちらの科学観に立っているかあきらかであろう。…(中略)…ガーフィンケルのエスノメソドロジーは、シュッツと同じ対象、すなわち「見てはいるけれども気づかれてはいない」人間の物象化作用をパーソンズと共通の科学観に立って、観察者の観点から解明しようとするところに成立したものだといえる。(浜, 1992:18p)

このように、浜は、ガーフィンケルの知的源泉が半分はパーソンズであり、半分はシュッツから得ていることに言及している。このことに関してあまり詳しく言及することはできないのだが、そういった立場も存在することは注目すべきことである。現在において、浜の議論は少数派にとどまっているのが現状だが、この問題は積極的に議論される問題だと思われる。

翻訳文献

Heritage, John C. 1987. "Ethnomethodology" in Anthony Giddens & Jonathan Turner (eds). *Social Science Today*. Polity Press, pp, 224-272

参考文献

アラン・クロン, 1987, 山田富秋訳『入門エスノメソドロジー』せりか書房

中島道夫, 1995「『意味学派』の立場」, 『社会学の世界』八千代出版

浜日出夫, 1992「現象学的社会学からエスノメソドロジーへ」, 好井裕明編『エスノメソドロジーの現実』